



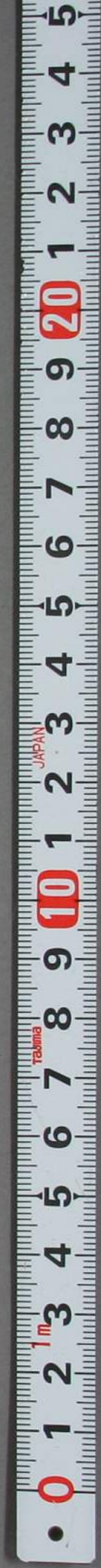
朝本

醉菩提

編者後編 五



3047  
5



3047  
5

稻妻表紙後編本朝醉菩提卷之四

山東京傳譯

俠客提婆達多品

後談

醉月堂

其比撰別の裏奈良街道深江とつゝ呀又提婆仁三郎とつゝ武士の浪人あり。曾武藝に達し。劍術柔術の指南して。浪々の営業と。獨身して暮せし。無頼凶悪乃輩るれを。類い友と集るならいあ。仇俠の悪棍等あり。弟子とありて武藝と学び。おのづか。俠客乃首長とあり。平日あまの。俠者寺をいごらひて。人立おられ所。徘徊し。技拵羅狼籍と事と。人災とる。更あわう。皆人それ。憎と。後日の仇とる。人更と怖て敵對せど。街はゆたの。者由除て。通し。益勢を得て。我敵する者。誇多。儲彼舍利弗。

大月存書是卷之四

鬼平次。幻蝶藏寺も此提婆が弟子であつたが。野晒がくちりし  
 耻辱をうけ大に憤。其日。ちふ提婆が家。又ゆさ。今様々々と毒  
 語。我々其仕返。しとせぬ。わしく。あひゆさむ。我等をうけ。はて。とて。も  
 敵。いづ。ゆた。何ぞ。後見。して。耻辱。を。と。ぐ。せ。た。ま。う。き。う。し。と  
 どの。くれ。も。提婆。これ。を。ま。て。り。そ。づ。き。我。ら。う。う。其。野晒。と。や。ん。が  
 腕。立。ま。う。う。ま。つ。る。が。畢竟。童。の。辻。誦。よ。ひ。と。き。う。し。と。相。手。よ  
 り。も。お。と。あ。げ。あ。し。と。ま。流。し。て。只。傍。痛。あ。ひ。居。る。が。門。第。乃。は。女。を  
 打。擲。され。る。其。俣。は。捨。ち。ま。じ。し。し。我。一。白。眼。は。白。眼。を。く。り。て。そ。の  
 俣。に。仕。返。し。と。ま。し。し。氣。づ。い。す。か。と。廣。言。を。吐。ち。し。し。い。せ。く。は。女。を  
 と。も。に。ゆ。べ。し。と。素。肌。は。黒。羽。二。重。の。小。袖。唯。一。重。を。著。し。朱。鞋  
 の。大。小。と。ま。し。し。三。人。と。も。に。日。和。下。駄。を。踏。あ。し。し。野。晒。が。か。く。へ。と。急

ゆ。ぬ。此。時。に。これ。二。月。晦。日。の。夜。の。こ。し。あ。て。野。晒。の。家。に。あ。り。尺。八。を  
 吹。ま。さ。と。て。居。う。ろ。ろ。が。夜。半。の。鐘。ひ。き。き。る。ほ。ど。い。つ。の。見。ま。し。ま。を  
 明日。の。部。あ。り。上。十五。日。の。初。出。家。の。所作。を。行。ふ。時。到。ま。う。と。あ。ひ。つ。  
 袈。裟。を。う。け。持。佛。は。む。い。い。香。と。焼。經。を。讀。て。居。う。ろ。ろ。に。表。の。戸。と  
 あ。い。し。く。打。た。し。さ。う。ろ。ろ。何。人。ぞ。用。わ。く。明日。来。り。ゆ。と。声。う。ろ。ろ。と。  
 の。か。是。ハ。物。買。者。あ。り。と。あ。け。て。棺。を。賣。ら。せ。れ。よ。と。高。乃。こ。こ。あ。し。を  
 止。ま。し。と。得。ま。う。と。吐。つ。身。起。屋。を。ひ。き。戸。を。引。あ。れ。提。婆。仁。三。郎。舎。利。弗  
 鬼。平。次。幻。蝶。藏。等。三。人。結。を。ま。う。あ。げ。泥。下。駄。を。ま。た。あ。し。打。通。り。  
 提。婆。の。あ。り。わ。い。早。桶。の。上。に。尻。う。け。て。片。足。と。組。臑。を。り。て。下。知。ま。れ。し。  
 舎。利。弗。幻。兩。人。野。晒。を。中。は。挾。我。々。の。昼。の。仕。返。し。来。つ。る。あ。り。同。道  
 せ。ん。我。々。が。劍。術。の。師。匠。提。婆。仁。三。郎。と。あ。り。人。多。く。勝負。と。足。を。け。し。

参らざらう。いざく勝負を決せよといひて刀に反を打てけり。野晒いさぐらう。二人とてあてつゝ。仕返は来らざらう。極て理あり。

更われ速は勝負をいさぐらう。な存ぞれども某兼て心は誓上十五日の。

間ハカ劍の勝負へ更あり。いさぐらうの詞争もをまじ心願めて已今宵も。

子の刻過明日の部はありぬれ。今ハ相手はさうぞう。何を来月の。

下白まで待たれぬ。其節は到らぬ何時もとも勝負はさうぞう。

仁三郎盧胡をへさういさぐらう。これある二人を人中にて打擲。

あらういさぐらう。今汝が勝手はさうぞう。時をいさぐらう。何乃道理ぞ。

殊は心願あざらう。昇怯の一言臆病至極のふるまいあり。さうく勝負を。

決まらざらう。舍利弗幻其詞の尾はつきていさぐらう。

尻をさうぞう。察する所師匠提婆の来らざらう。ゆきに怖とあての。

事あり。さういさぐらう。立合とせり立ぬ野晒いさぐらう。たそ臆病昇怯。

こいさぐらう。心の誓言ハ破らざらう。えらう通り俗体は誓衣とけ出家。

といさぐらう。我安此所をまじけ得心して飯ておらるや。これ手とさけく。

頼まらざらう。耻をいさぐらう。化らう二人ハ其弱といつてこそ益勢強あり。

此場はのぞいて何の得心。いさぐらう。立合。これでも決立合ぬ。いさぐらう。毛腫と。

ひたまくらて泥下駄を肩尖は踏かぬ。幻ハ立寄て野晒は面上。

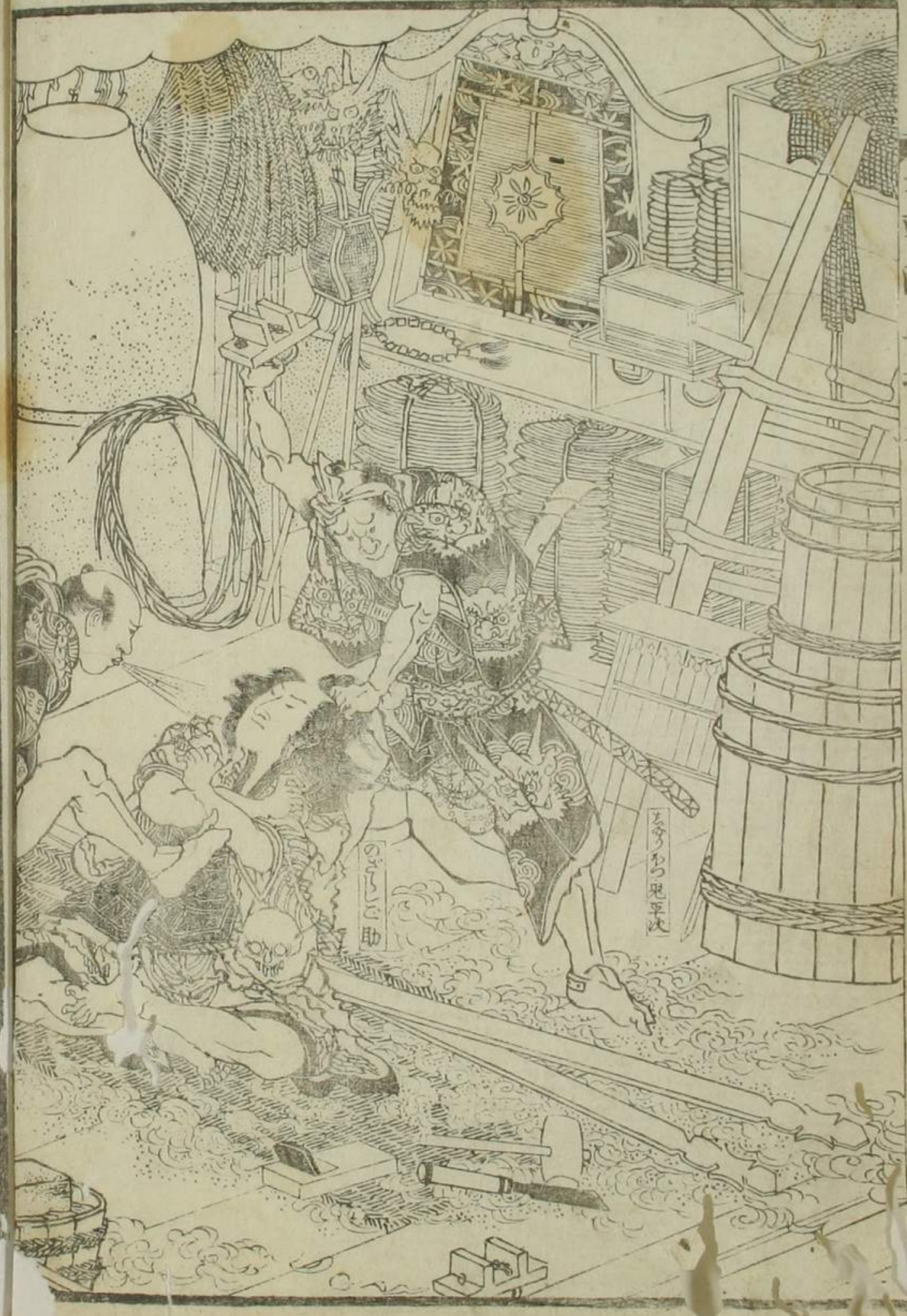
あらう唾を吐けり。野晒ハ双手を組心の怒を志のびつ。たさういさぐらう。

あらういさぐらう。手向ハ仕らぬ。いさぐらう。堪忍して戻ておらるや。これ掌と。

合とて二人と頭をさげ身を伏てさうぞう。に化れ。仁三郎肩とゆさう。

て盧胡迹比此難波少腕立とていさぐらう。ゆさう。少少いさぐらう。ゆさう。

といさぐらう。案外ハ臆弱者。これ二人の者勝負をせざらう。存分ハ。



本朝 離 善 揚 卷 之 四

遺恨とせ。さうくといひぬ心得とて二人のありの率堵婆とあ  
 ちつて。連打小打れ。野晒の鬢髪乱と衣服破きて。見せしる体とあ  
 かまで打擲せ。とて手向せぬと誓つて。あつて寄べかか。踢倒し  
 かあ。寄べてあつて。踢飛し。提婆か。つて倒れ。仁三郎泥下駄。面  
 と踏み。踏飛を。あまりの度。野晒へ。誓と破り。彼奴原を。微塵よ  
 あつて。あつて。襟に。けり。架。を。あつて。あつて。辛抱。拳を握  
 牙と。怒を。あつて。居。仁三郎立寄て。つて。汝男を。たつと  
 日来。の。誇。と。あつて。口。程。に。あつて。此。あり。さ。あ。あ。今日。男。と。立。ね。ぞ。  
 少。も。无。念。と。あつて。手。向。せ。男。魂。の。さ。さ。さ。と。恥。む。と。ど。  
 一。言。の。答。も。せ。ぞ。唯。低。首。と。居。り。る。舍利。弗。幻。両。人。の。勝。は。胸。を  
 とつて。倒。し。悪。口。存。分。脛。存。分。虎。の。威。を。あ。意。趣。を。し。野。晒。の。口。

自由。に。あり。踏。ま。て。も。扣。ま。て。も。口。を。閉。る。无。言。の。行。難。行。と。こ。そ。あ。え。よ  
 くれ。舍利。弗。幻。両。人。の。店。ふ。あ。つて。葬。具。の。賣。物。箱。蓋。天。蓋。龍。頭。灯。棺。  
 早。桶。瓶。の。類。と。微。塵。の。如。く。に。打。碎。べ。仁。三。郎。これ。を。見。て。呵。々。と。打。笑。  
 快。々。と。あ。つて。汝。等。が。存。分。に。仕。返。し。あ。つて。証。あ。つて。う。け。ら。る。耻。辱  
 す。げ。は。し。それ。と。下。知。され。舍利。弗。これ。と。心得。て。又。野。晒。小。立。向。下。駄。と  
 とつて。あ。つて。と。打。ひ。忽。額。は。癢。つ。さ。て。鮮。血。を。あ。つて。流。れ。ば。辛。抱。づ。れ  
 野。晒。も。り。名。堪。忍。あり。が。う。と。あ。つて。あ。つて。今。誓。言。を。破。り。て。い  
 百日。の。刈。方。薪。を。一。日。に。わ。ら。び。を。同。然。出。家。の。行。の。か。ひ。も。か。と。怒。り。の  
 猛。火。を。忍。辱。乃。法。水。を。打。消。て。唯。う。つ。ひ。て。不。言。千。金。の。幣。の。懸。目。  
 為。に。あ。つて。これ。ぞ。真。の。大。丈。夫。却。て。強。く。見。え。ら。る。底。意。と。知。れ  
 三人。の。飽。ま。で。詈。る。悪。口。雑。言。あ。張。合。の。あ。つて。腰。抜。め。と。大。口。あ。つて。打。

あつり 顔にて飯り多う。○かくて野晒へ下十五日の到を待化ける程あり。下旬にありれば前日の返報して彼等と懲りし。諸人の災を除べし。日毎又出て三人とつけぬひけるが折ありて出合ど素家あゝ居ぶ。此れも弥生の終るれを天王寺の櫻今と盛は爛熳を花見の諸人群集とかり。木の間に幕打まゝ。酒酌くして遊もあり。糸竹の調は奥をそむもあり。憎恨までふたひるに提婆仁三郎舍利弗幻と前は石仏の苔九郎。宰堵婆の露助枕飯の犬平太手向の水右衛門骨桶の白平あどつる狭者どもと。十四五人あどつて。天王寺の境内と狂破歩行。此の幕に踏こみて酒肴と野望し。彼処の席に到て悪言とひらりし。遊真の妨して弱を侮る無法者。つらつらも意より。これあれバ誼嘩口論をまじり。杯盤を踏碎狼籍をゆるゆゑに人皆避て管ふれい。

奥ある更なるの益狂破ありき。時に野晒悟助此更とまじり折ありし。あひは。彼野晒の衣服と著し。較鞋の大脇差と。尺八と腰さし。手巾と襟と結び日和下駄を穿て天王寺に来り石乃无舞臺乃。不とりはつ立て待るに提婆組の狭客ども酔ふ声高く。小歌とつひ連て来りける。野晒それと見てをこへよれ所あり。出合せり。つに舍利弗幻は前日汝等が勝負と望し。時我つし。そのうちあれバ下旬までのがりえよといひるに。提婆とあはれて立合ど。鼻怯ありと。誓し。えれば今日へ提婆と首として。十四五人の方人あり。今爰て勝負とせむ我鼻怯あり。更明白ありん。つに総がりあり。勝負せよと多勢と少し。おそれざる。大膽不敵の一言に。さし。も乃提婆も気と吞きて臆し。弱身と見え。と盧胡汝自来つ。

勝負と秘の石と抱て淵のぞと。薪を負て火に入は異ど危直。望むとも命と大事にぞく。飯とと罷るれば野晒のぞく。舌戦无益多。つゞく勝負と身支度と。提婆の衆人に下知をか。若汝寺敵が。とれ出て助太刀せん彼奴と。鬼神にもせ。双拳四手に敵が。多勢に不勢物数あふど。傍の石の水盤に尻くけて見物も。其餘の者下駄ぬぎと。尻ひらけ。目釘とありして立むく。野晒の袖まらして大手とひらげ。石の舞臺の真中に仁王立。立るなり。勢猛ぞ見え。花見の諸人のと。誼嘩と立騒遠。退て見物も。老人女の足弱。四方に乱と。逃まぬ。かくて悪輩。抜つてすさま。斬か。野晒の腰。手もくげ。上と。へ身と沈め下と。へ飛上り。右に開き左に避。斬と。と

かいら。或踢倒踏飛。手當と。の人飛礫陸離々と投。閃々電光波上の燕子類。まれ。早業。大勢の斬と。刀の。只空と斬。或襟首と。蓮池に投。鼈乃。ありて浮つ沈つ。又。片打に。敷石に。平蜘蛛の如く。ありて。敵。十四五人のうち。過半。逃失。今。提婆も。身起。舍利弗。斬と。野晒も。一刀と。三人を。逃。追。戦ぬ。元来野晒。刀の。人。皆真劍と。折。夕風に。樹々の梢と。吹散。花の吹雪を。身に浴て。双方。野晒の益勢。猛。敵。提婆



山門の楼上にて又あつて戦へば足場悪ければ提婆方の者も殊更  
 敵へがた。投ちてされて氣絶する者あつたり。残る敵はさへも  
 逃下るを野晒も跡を追て下りけるに提婆いつひに逃去ぬ。これ困て  
 舍利弗幻兩人を捕(前日の返報りゆると叫りて)兩人の額と打破て  
 つき飛せ。兩人の鮮血流る額をおろし命からぐ逃去ぬ野晒のころら  
 うとさひの呵々と打笑衣服の塵を打払い緩そとて飯りたり。諸  
 家に取てあつて休息をうらに黄昏の比とありまれば灯火ともし  
 戸とありあつて居たりるに六十歳をりの貧げある老人針目  
 からある布子と著て杖にせり。打たれり来て裏に合はる亭主  
 五つにあり見といれる早桶をりひまあふといひを野晒いられをまて。

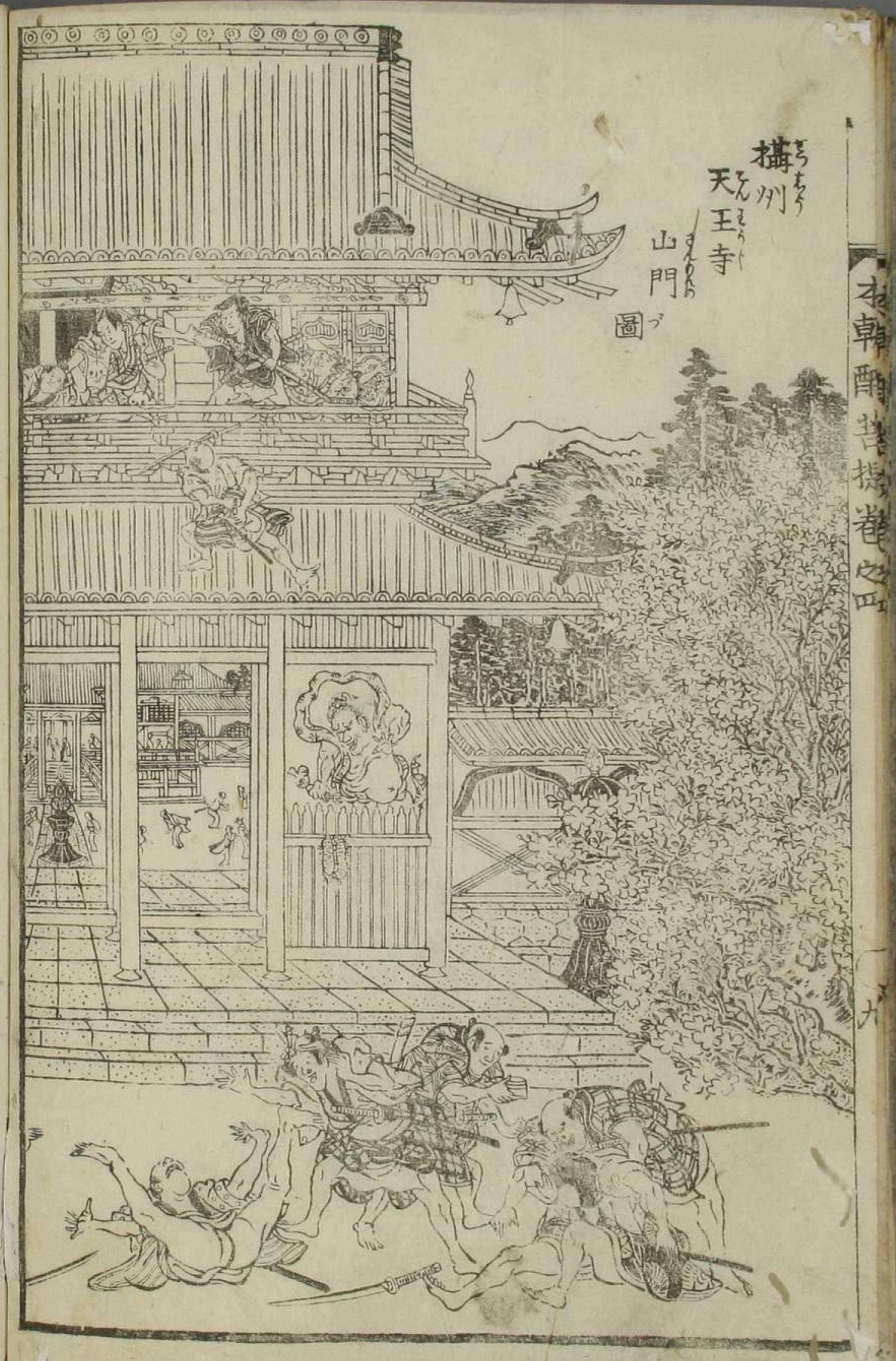
幼き人の不幸でござる。死小別のつと悲きりのあつ。そりる小兒とあし  
 ていざど愁傷でござりまふよと。老人涙を流し。未お若よとつて  
 ござるし。有様は孫娘でござるが。生つきも相應ゆゑ鳩鷹と  
 産ごつと喜んで育ま。こに悪疮瘡に取られひくひつて苦むゆゑ  
 貧中で物とまど。醫療を盡してえられぬ。縷かひもあら。紅紙燭  
 赤き頭巾とまて。俵でつひにころりとありま。起上るべき達磨さ倒し  
 まの死姿愁事聞木兎と。さそひに來る死神のまを无常乃風車。  
 今の遺物とあしゆゑ。あまりの夏の中へ。疵瘡神の祭棚を打破  
 赤い紙の幣帛まで引破て捨ま。見子め男がけさづかう。こつて  
 居まを。媳婦の愚痴ある女氣に。あまらう。て亡骸を抱あげ。乳がさを  
 めめ子守歌とつて。どよめり。気ちひの体ありと。やうくと慰てせめ。

来世らいせいの羨うらやま麗うつくし仏ぶつ小生せうせいてえりくとつらふ顔かほも今いま紅べに白しろ粉こなをけりて居ゐま  
 うゆいこととままうとと泣な声こゑあて物語ものがたりもとと落おせ一ひと耳みみの念珠ねんじゆ涙なみだと玉たま  
 あつとつ。実理じつりとらひて。野晒のびし立上たちあり。五ごつにる小児せうにあ。此こらういあ  
 ようりち。ちのうた桶かづとさ。出でせ。懐なつかしう 銭ぜにとさ。怛あはれささる事こと  
 珠たま銭ぜにもつけ紐ひものある孫まごめが著物きりぬと今いま質ちかりして。これに替かへて来きはさ  
 泣なく 價あひとつてのひて。緊あ長なが生なまいをほしまりのと。ゆひら。桶かづをうらうげ心こころを  
 聞きよの佛ぶつ迷まよ夜道よみちとぞぐと。孫まご葬むすぶは飯いひけり。其跡そのあと一ひと中ちゆう年ねんの男おとこ多おほ二ふた人にん連れん走そう  
 腰こしをかけ。これ侍ざむらい亭主ていしゆ十六じゅうろくにる娘むすめの棺ひつぎ角かく棒ぼうの四よ方ほう花はな價あひありうぬ程ほどは  
 念ねんの入いととさうれとらふ野晒のびしハ棚たなをあへ。棺ひつぎをさう。これあさうと直なを  
 さうら。棒ぼうをさうげ。清きよ鉈な。おあひの釘くぎを打うたひ。あさう待まちまふと。いひつ  
 仕し度どに取とかれ。随ま分ぶん丈ぢやう夫ふうにさのこまを。待まち間まに二ふた人にんが物もの語ご。これあんと

さやがど羨うらやま麗うつくしわの娘むすめ子こ野の辺べにおろて烟かぶりにさる。あしひひていあまいう  
 さるげ。わの娘むすめ子この帯おび解との祝いわいの時とき。肩かたにのせて神かみ糸いとをさる。今いま  
 棺ひつぎに入いて又また肩かたにのせ无な常じやう所じよにわらふと。更さらにあひもさうぬ。よの野の呼よ  
 縁えんがましまり。結むす納なも受う納な双ふた親ねのこころの喜よろこびで。おろとさ支あなも  
 そろひ。一ひととの吟うた鶴つる亀かめ繡ぬいと色いろ小こ袖そでを備そなへて。香かうの煙えんであさる。こ  
 さうら。いさうの事ことさやぞひ。兎う角かく羨うらやま麗うつくし娘むすめは。氣きのこの出でるりの。や  
 ろらつとさう縁えんづけ。此こら事こともあまのあしひひ。話わまをたれて  
 忘わして居ゐ。これ編あ笠が七なな蓋が櫃び土つち器けも入いまをさやうのひをれを心得こころえはさ  
 野の曝ひ棺ひつぎと仕し上あて。二ふた人にんの者ものの受う取けて價あひと償あひ飯いひ去され。少おほ野の晒し  
 唯一ひと人にん手てとさぬ。嗚な嘯せうとて居ゐ。独ひとり言ごにひひ。此こ商あ賣うとす  
 か。に愁うれとさ。常じやううれ。熟じやく浮う世よと觀かんるに。りの雫あ末まの露つゆ。あくま



野の  
悟助  
仇を  
しよる  
行



攝州  
天王寺  
山門  
圖

本朝齋藤卷之四

木下三三三

先立立のあけい。殊更光陰のなれば夏江漢の流る如く春去秋来。花開け葉落て燕子鴻雁時とあるはうせと然る人も人情のあけい。是と常とをゆゑにこれに對しておどろかぬ。朝夕唯奔走。其營業する所と樂耽る所と異なるれども都是名利の二ツと出ることなり。されば人无常迅速の理をあらわし其果報の各高下ありともわかからに。他と貪瞋心あり。只一生と安らるにわかまかりたことありとらひて。歎息あつる折し。砥盥の水にわすれし人影うつりなれば。さていと推量しつても。さあぬ。今日、跡生の晦日なれば子の刻をなれば。又出家いで一睡と奥に入夜著引くきて卧にり。借舍利弗幻の昼の仇を報んとあひるが。立合の勝負はともるへどとあひて。寐首と打んとあめし。合せ兩人ともい手巾にて面とつみ。門首乃柳とつらひて

引窓より忍入拔足して奥に入野晒が寐息とうめひ刀と抜て唯一打とあつる。野曝はと。驟と立て熟睡の体をなす。足音と考へて居たり。忽ち起上り。左右に兩人とあいつみ。て声烈くあひる。尋常に名告りて勝負はせむ。寐する所と打んとい身性至極の奴原。糸我一棒と骨にうけて。以来心と更もと叫り。棺の棒とおひとて。兩人と連打に打つる。力者に打てて兩人いんとつらふとあり。其まゝ息の絶果ぬ野晒の大は驚き。殺も心よりあつる。名いどいづとあやまり。後悔さよと双手と組我出家の行を始し。殺生戒とさちら。人の更あり。鳥獸莫虫の類迄の命とるまじと誓ひ。あつる。彼寺と殺せし。仏縁薄く。志とこげがうに。因縁にこそあつる。人を殺て生存べき道理あり。繩目乃耻をうけん。爽に腹まうべしと覺悟を極

較函の一腰と取出して抜けけり。これへ又引めて自殺の用ひに立ざる  
 ので我あがし狼狽しとるひ。舍利弗が刀とらて見たり。かゝる悪黨の  
 刀と用ひの穢ありと投ぎて。何ふか双物と四辺と見え。華具と造る道具  
 ぞりと顧るも。鋸鉋鑿釘の類。少て一つとて腹とまらば。双物あり。わ  
 せんさあ。二人の刀のうちとをひとる。わどく腹よつとんととる折しも。  
 かれまで悟助をやるか。声ひけて屏風の陰より突然と出り。是乃一休  
 あり。野晒へ打撃。馬師の坊主ゆゑや。この間にけ起りて我家にあら  
 くるぞとふれ。一休のさう。不審へふあり。我今に當国住吉に住あり。我  
 前に越後の山中。て天狗に学得る。隱形の術を以て。宵より爰よ  
 かれ居たり。過年如意山。ゆて汝が切腹とら。今又切腹とら。わらこ  
 是一つの因縁あり。此二人の者。元來兄弟の山賊。ゆて舍利弗鬼平次に

兄弟そ有漏路太郎とら。ひの蝶藏へ弟とて。无漏路五郎とら。一者あり。  
 如意山の雪中にて。汝が母此花と殺せし。此兄弟の者。ともあり。  
 我道術とら。てのち。是と知る。汝と勘當せし。行跡を  
 みく。一の。これあり。ど。一。俗体に。一。如此母の仇をむ。い  
 ちめんが。為。二。宿因と。呼。醒んが。あ。わ。我。宵。より。此。に。あり。て  
 汝が。獨言と。ま。け。り。無常。迅速の。理を。ま。い。め。し。真。乃。悟。道。よ  
 到。ま。る。あり。今。に。勘。當。ゆる。を。ど。と。の。さ。ま。ん。を。野。晒。い。つ。て。と。れ。と。ま  
 さ。せ。い。此。兩。人。の。母。の。仇。と。い。ひ。し。と。ん。ど。仇。と。報。し。も。師。の。恩。惠。條  
 故。あり。と。て。喜。ば。一。休。再。の。こ。ま。り。我。友。白。炭。の。忠。知。幸。近。比。此。地。乃  
 縣。主。と。ら。り。今。に。當。国。に。う。つ。て。平。野。郷。に。住。居。せ。り。我。明。日。忠。知。よ  
 對。面。し。て。此。者。と。ら。の。惡。事。と。な。り。く。物。語。汝。が。殺。せ。し。仇。打。ある

事と告ぐべし。このころ折しと夜半鐘葉然といひきかれ。一休のくぬく。わかれの鐘いとも九つ翌日の則四月朔日汝出家の行をいひきき時到来。形俗を仇と報心の僧少て情を施し。此兩人の死骸を葬て得きとて。袈裟とて野晒が襟は打つけぬ。我へ庵は飯るぞとて立出ぬ。野晒のりておもき師の侍恩の世少く報すべきとて礼拝し。門あけしと立ぬ。商賣物の桶と出し。二人の死骸とて。棺の捧とて一荷よぬぬ。千日寺に葬ぬ。翌日住吉の庵より再剃髪と後ひるに。一休のすまふ。汝悟道とてさあ。僧形俗体の差別は。其終るて我大刀持とありて仕ふべし。のりて汝は語し如く。我朱太刀の汝が父嘉門が最期の遺物なれ。我大刀持とありて父はけりるも

鑑塚

同然ありとのさま。野晒の大は喜び立飯りて。家財ととりとて。是より一休の庵に任てまあやふ仕へり。一休は太刀持のりし。傳る此悟助が吏ありとて。偕白炭の忠知。一休乃物語と兼て。彼悪漢をも捕へて追拂づく。これ居たる時。れ急ぎ公差を召て其旨と令つけり。提婆仁三郎とて。其の者も。速此吏とすつけ。一夜のうらふ出奔し。行方もあれどあり。地獄信解品第七

一休和尚始山城国岩倉山の麓にあり。其後撰列住吉に移て住み入。一休のいし。山城国に任たまひ。時一年津の国に到り。住吉の社に通夜。いし。八旬許の老僧香染の袈裟とつけ。おへりける。一休の問てのさま。和僧へ何国の人あるぞ。一休答てり。

都方の者あり。僧又のるる。都の人ふ定て歌と詠たまふらん。  
一休曰吾も桑門あれど我國の俗あれを今夜も神明の手向りや  
かりもづんとそひて愚あつても一首と幣にかえ奉侍。

素て刃れをあらと火宅の宿多となん住者と人のいふらん  
老僧是とすあひ歌の意を殊勝といふゆゑと。此僧いさも不存とて

素て刃れをあらと火宅の宿あれを成とあらへ住り  
一休これとば愕然とて其奇異と歎トらん。わを多く夜も臆とわけ  
まらうらるに彼老僧何地ともあへ行方あれどありらるはど一休されを

こそ是は明神の化現あらうんと。世にありがごとくあがされ。是はうら若倉  
山の麓と去て任吉に移草庵と管てこれと林葉庵と号て任ひらると  
も。其比泉別塚北莊高須の花街は地獄とらん名高き遊君ありらる。

一休此夏とすあひ。さて心あきま名とつらう阿曾比か我試とめて  
刃るべとて一日酔はふとて独庵と出ひ浪々陰々として彼花街と

到のゆ抄此曲中へ実は欲界の別境あて。絃歌乃声弄曲の音常ふ  
絶む花の曙ゆへ遠山の眉艶しく月の夕あふ蘭麝の薰濃ふしと。

一笑千金の媚鉄心と鏝の機深し。され賢愚とけりごと貴賤を  
へててど。取る編笠来る頭巾往來紛々として喧く淫声邪色は迷ひ

来り人の圈套は身と墮が如く。花言巧語はわづられて費を金湯鍋  
は雪と深し似たり籬々にうら声琴の凡音あぬれられ哀情未

練の狂夫寺浮とあらて。我身とて身命とあげら輩あむれむら  
ありと凡欲无垢の汚すあらも。世の中のありさなと思惟しきりく。

彼方以方と歩行あり。彼地獄へ珠名の長といふがりの遊ひありと

聞て其家とてつひて門首に立ちぬ。我の地獄とやといひ一盃と酌んと  
 きて来て来る者あり。そく導て彼に逢し。いとこのまひたるが中居  
 下男寺のそとにげに走らうて答ふにせざれば一休氣をいりちて  
 おほいことと辱まぐつてあひに。一箇の奴僕立ちて。一休と顧るよ。  
 墨染の麻の破る衣。鈍色の垢つまる袈裟とけ。頭は銅乃  
 瓮に似て面は瓦鍋を疑容顔頼し。てを食僧の如きれば一休  
 こそは。知を心中に見下陋て何といふぞ。地獄の君ふあらんや。そん  
 非分あるついでとあり。たそ千金と擲富翁ありとも。前方は約束  
 あくそ容易よまきえのふ花魁よあつど。見れば汝を食よいそん  
 出家より汝がどに貧僧は。側はたも寄りあふりも。殊更つての  
 光明と放しを。結縁とをむることうらじ。汝が一生の念珠の突と

携来ちとも一夜の歌銭あつて足ぶらうど。とひてのふと笑ひしを。  
 一休大に怒りぬ。阿曾比といふ者の原賣物あれば其價さつてのらむ。  
 つら者にもゆき理よあつどや。我姿の貧れを定の價と償つて  
 おり人のこととらふ来つれ。そくわりのよとのまを。中居下男ども  
 寄集り。これに食の狂僧を評議して。さましく嘲弄し  
 るは。一休酒氣とあひぬれを益怒に堪あつて。汝寺不礼の  
 ことをつらむ。我拳の一棒と以て。汝寺が頭と微塵にさすまことと。  
 一越声とのげ一喝して。詈めを。彼狂人のわじ。物狂りの曲者  
 あつて。後日の懲め打扣と叫り。これを此騒を隣家の下男  
 ども集りて。一休の襟首とつて。大道に引出し。大勢棒と  
 とうて。つらむ。さそに出家の形なれば。打とせ。唯口よ



詈てぞ居り。折りもつゝ。一個の花魁蓮歩を。柳腰。練來る其扮。緑の黒髪。今。著重て紅のひら鹿子の上著と著。地獄変相の面と五色の糸。手とらて繡ある。袿衣とまゝ丹地の錦の帯と結了。踢出結の。ひま。紅の視のひら。焦熱地獄の炎と踏くと疑と。木の薰馥郁。として交加人の魂と棄。年。十九歳。国色の羨艶容。柳の糸のたやう。肌。玉の白。風情。此世の人。天津乙女の天降て人間。遊ぶ。龍の宮の乙姫の海底より出て慰む。あやと疑。

回々鼻の形と繡ある衣服と著せて。左右。赤手巾を。長柄の日傘とさ。異風の打扮あり。是乃地獄の君。地獄此方の騒動。体。何。老女。僧君。狂。地獄これと。狂人。妻。對面。其。大勢の男。地獄の君の来り。左右。通。地獄。何。醉に堪。

姿とつづく。とんもの花と欺き月と唾の貌をれど。さてもたぐひ  
まれの養人ふあどあがり。他の言ひあて。

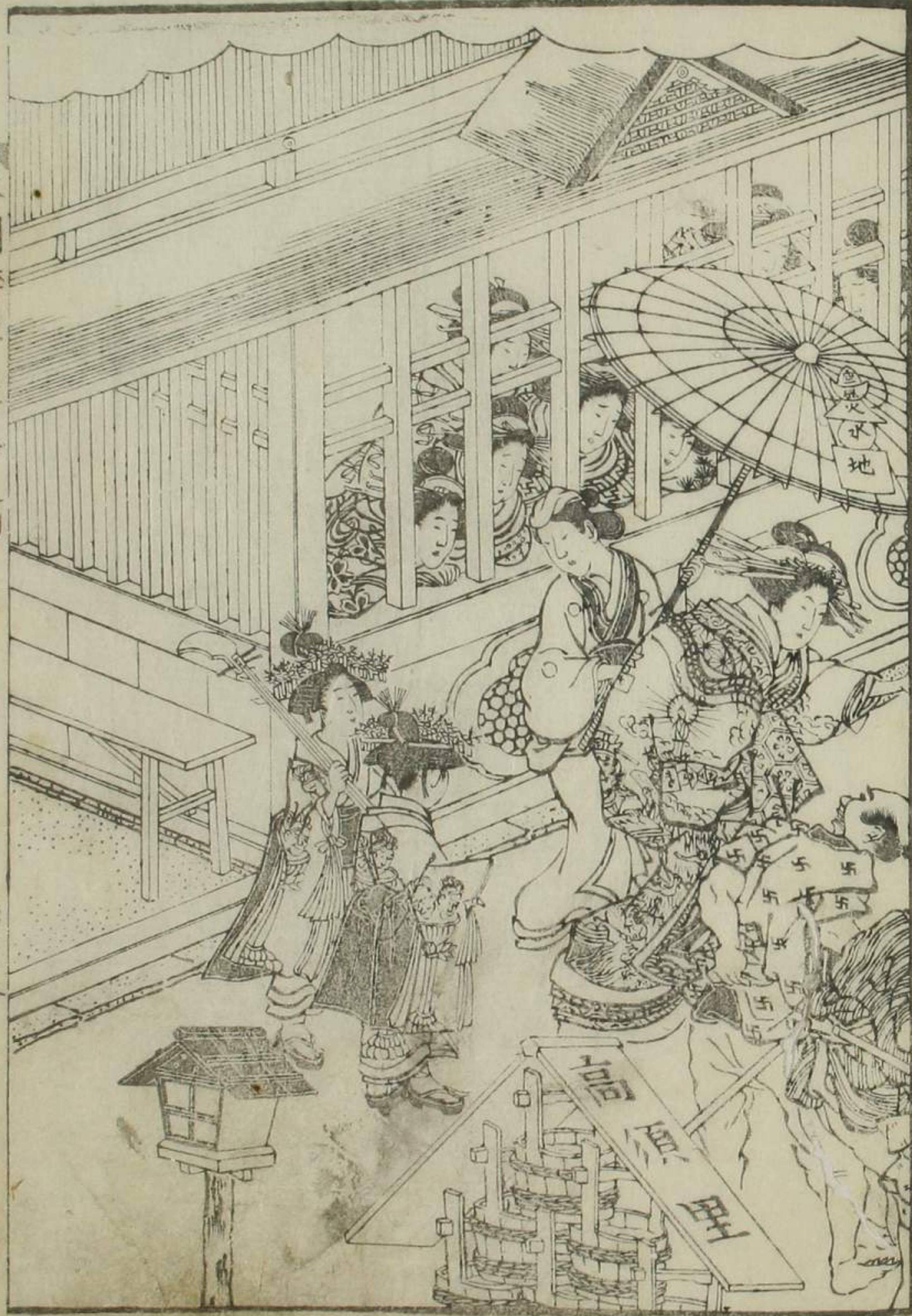
聞し。うり見てもさうしき。地獄哉

とわをさうするに。地獄さうゆけど。

活来る人もあらざらぬや

とあらうれを。一休果して是常人にのぞく。いふ心あつたがらぬ。  
我実一住吉林茶庵の一休なり。我とて出家とも。汝もさうさうさうさうさう  
たれ。地獄打笑。たえ活仏にもせよ。活達磨にもせよ。妻が巧計の捺落  
に。おとやさでやめさ。いささうさうさうさうさうさう。ひごと寄る。  
緋々たる素手と。一休の衣の袖に。う入手と携てり。さういふれを。  
大勢の男寺。地獄が心の裏とさうさう。唯のきれと。退ける。地獄が

住閨房の池にのぞく。造出なる亭。床違棚二階の厨子の。うつけ。  
繪障子屏風の好風流清雅に。且養麗あること。いんをさうさうさうさう。  
一休。此坐敷の上。坐に。跣居。ひいて。酒を持来。と急さうさう。  
地獄中居。命に。養酒と淨饌と。出さうさう。一休とれと。見と。  
かる素物の味。我十三歳。少師の坊。養叟和尚。よけ。さうさう。  
活鯉に。引導と授て。食せ。さうさう。然後。鯉の養味。あること。後  
あがて。忘さうさう。さうさう。鯉の羹と持来。さうさう。いん。地獄又  
中居。おのれ。令。鯉と調。と出さうさう。一休。これ。さうさう。  
大に喜ひ。いん。鯉を。ひさりの。食。ひて。数盃。とさうさう。味。いん。養。ありと。  
讀。いぬ。時。地獄心の裏に。想。さうさう。一休。活仏。さうさう。人尊敬。する。  
と。さうさう。出家。乃身。さうさう。食。いん。さうさう。さうさう。り。



一休塚高須の里に  
 来りて娼家と罵る  
 娼家の奴僕一休を  
 ちりかこみて打んことを  
 此里に名高き  
 地獄とらひ遊君  
 とれとせりて  
 一休と  
 問答を

禪機に託して人と欺賣僧のわづらと疑心とわづら猶彼が  
 本性と試べしといひ中居女の耳につまてあつぐせよと咄耳  
 程のわづらゝの舞妓歌妓白蕪蘭と凝粧紅粉と尽て  
 出来り。笛と吹鼓と打迦陵頻伽の囀が如くいゝ舞妓へ長き  
 袂とひるぐりて。鸞鳳の如くに舞を一本益貞とあひ大盃  
 ありて又数盃とあつぐけ十分の酔と癡。我の羅漢舞と舞て  
 又とべしとのさまいけ。偏袒右肩の片肌脱扇と開て立上り  
 釋迦殿が。目もさのにあり得て。天地萬法とをめぐり。こゝろ  
 目もさのりと説め人草木さへも佛にあらを。はして況人間の  
 など佛にあらざる。釋迦殿も弥陀殿も皆佛とわづら。いゝも  
 道理ををつまよ。目もさのりも人ぐに。知さん為とあれこれに

後にかき  
 も國此等と  
 俱舎論の  
 舞と多け  
 て多舞妓  
 とさるに  
 あつる事  
 續編に  
 せり

物にうそきてあつぐらさる。凡夫の心とあつぐらさる。美理ごら  
 りて一言も目もさ殿にひのわでど。大かうそよ赤うそよ。うそと  
 つらまの佛にやせまの。そらや又やせに方便うそへ皆實誑や  
 飲や一寸さへ闇の夜。うそも舞も法の色水の百系目光と  
 わづらせはうそも舞も法の声。来世も過去もあつぐらさる。と  
 三世不可得人心かうね。所が極樂に。かろし心か現世あり。  
 さらうとあつが過去とあつ。梯がうらうても天へのびら瞿曇の  
 経へいゝやせぬ。うそも由らぬも咎むれば。皆悪にこそあつぐら  
 りて者か世に出で。あつぐらの人を迷つる。心らんわづら物と  
 りんちんまうくうつと一筆に書らんあんど松風の音。二つ  
 うた物一もま。墨繪の風のうつておく。涼やあ。體が

契うろ不動殿悪魔降伏かしてりくと。かゝるごよいとあふまゝ  
氣ぶそ所が悪魔あり。かゝるごの五輪茶臼にせいの。ごまされか  
アんのとせよ。悟の何の悟ぞや。悟ぬ前か悟らう

と声たやうにさうひつ。足拍子と踏まじし。かゝるに倭燈ころごよ  
歪とドマリドアそ舞あ。地獄の寂前より外の方に出て様子と  
窺居けるが。あうり障子にのまゝの骸骨の影うらぐれをころい

怪やと打驚き障子とわらふのりて裏と見えらる。无舞妓も歌  
妓も。残らど骸骨の姿見ええ。唯一休のゝ依然として其うらふ  
交て舞あひるれを地獄の忽疑とまじし。誠是凡人の野為あぞ

と奇異のちひとや。障子とひらきて裏に入。妓婦もあふ原の  
姿と見えにら。已に一休の酔ふれて其体倒臥たまひるれ。地獄の

妓婦寺と退らせ。女童と呼で酒肴の卓子と收拾しあ。ごう  
一休と抱起し雛妓と共に昇上て深閨に入り。へとさう移たる  
紅の裯乃上に臥しあけるに。前後もあうご。熟睡したまひら。

鼻息の車のとごうくが如く。雷のひびくに異なり。地獄かひ  
る。此師乃禅機甚深密とあわれむ。あうどしく本相とあへ  
あふぬト。さうさうさう。かく来臨と恵あふこと幸され。ゆにそ

教化にわがうへ。とあひ。かく大酔しあひて。あうご。夜中に吐  
あうめ。よろしく其用意ととべ。あひ。女童に命ト一土瓶の  
湯とさうさうせて。火炉の上に放水注子角盥等をあぐりけり。

灯火とあれらるに挑一休の枕上に坐して目もたまさうごまわり  
わう。良わして一休終に目を醒し。酒氣の熱さるに堪ざるにや

自己袈裟衣と脱きて。擯鼻禪のそにあり。大の字形に横りて。  
 又志づくと睡られけるが。悪心おびと体にて。のをむきに寐る。俛して  
 口より嘔吐とほの。臑臑の胸の上に流きえんと。臭気鼻と襲て  
 堪へず。とらへむ。地獄へまゝもこれとひとごと。手帕とらて拭  
 清り。ちづらに揺醒て湯とまのせらるに。これと飲て再睡ありと  
 ちづらくあり。かくて夜半の鐘もひびきくるに。一休又睡と醒して  
 身と起し。大酒に倦疲する体にて。屏風の外に這出ぬ。欄干に  
 ころつき池に臨て。酔竜の水と吐が如く。ぐらぐらと嘔吐をほのめい  
 けるに。不思議あり。其臑臑の池の上に落るといふ。小鯉と  
 化し。つととく水中にまゝ入。活潑とも終まりて。水底より水  
 々。地獄此ありと云と見て。大に驚き。妻の又こぞうてこの師を

活佛ありと尊敬するも。突ふありと信心をやまらる。背を抚て  
 介抱し。角盥水注子とさう。口ととせ手と洗せあどし。湯と  
 まのせられ。一休。こちよげふこれと飲。只夢幻とゆららる。ふ  
 体にて。又閨中に入。前後も知ど睡らるるが。已は天明よあけひて  
 全睡と醒し。あひ四辺と顧て。地獄に對し。你の那個あるぞと問  
 ぬ。あひ。妻の地獄とアを遊女あていと答。一休のこまじく。爰に你を圍まらる  
 我の唯庵中にわらうしとらひぬ。昨夜の酔中の変と想ひせせを。  
 いらさぬ。妓樓に来つるのこのこまじく。つそがへし。袈裟衣と敷正て  
 出。去んとさる。まひるに。地獄其袖といふ。妻問し。これゆらさる。と  
 志をうく。とさる。まひる。とつた。一休何等の間ことわりや。  
 ころくつとこのこまじく。座あり。時。地獄蘭麝の薰。馥郁と

袿衣うしろぎとびげひてひと抱かかきつま。笑わらと含こめ。正徳しやうとく摩ま時とき如何いかと問と。  
一休いっしゅう委あ々あここして文殊與あ女子しよ无な縁えん无な目め仏ぶつくと答こため地獄其その意いと  
解げせど再またひくるへ。平相へいさう国くにに仕つかへる白拍しろはく子こに佛ほとけとひめめの道長公こう  
と歌うたと讀よみくらくらく江口えぐちの阿曾あそ比ひ小觀せうくわん音おんといのめめり。さる名を  
つまりも。菩提ぶだいといららら仏果ぶつぐわと神かみの意いあらん。妻がこらく浮う川せん  
竹たけの流ながれと汲くみ心こころにあわるで肩かたと画えきし膚かわとあひこらく妖狐ようこの態わざと  
ままぶ。あさまきまきまとある。前世ぜんせの戒行けいぎやうつまりゆとあひひといふ。未來みらいも地獄あららるゆぎ。せらて懺悔の為ためにもと名なと地獄といふ。  
袿衣うしろぎにも地獄乃すなはと繡して身みにまとひひひ呵責かさくの罪つみと今世いまのよに  
滅めつ。后のちの世よへ極樂ごくらく世界せかいに生なまる麗仏らいてふといふ事ことと願ねがひひゆまり。  
地獄ぢごくといふいくらの所ところにいかん。もんふくとささくといふ一休折せし

衣い折せは鉄のうろし。彼かの地獄ぢごくの繪ゑの袿衣うしろぎと指さぎてのこまりのゆが  
衣裳いしやうに繡ぬいしこらく地獄ぢごくに種あらくの変相あらる大地獄といふ一は等とう活かつ  
二ふ黒繩くろじゆ。三は衆会しゆかい。四は叫喚きやくわん五は大だい叫喚きやくわん六は焦熱せうねつ七は大だい焦熱せうねつ八は  
阿鼻あひあり此ハツの大地獄は各十六じふろく所ところの小地獄の根本こんぽん八はに百二十にじゅう  
八はと加くわへて一は百ひやく三十六さんじゅうろく地獄ぢごくといふ。其地獄ぢごく遠とほれのどと近ちかいは此この一いつ室しつの  
裏うらこらくく地獄ぢごくあり。夫焦熱せうねつ地獄ぢごくにあらるどと火か車くるまの畜生じやうじやう道みち  
にのどとて牛の登ねらうて夜よにあらる支しをいびらい黒闇くわん地獄ぢごくの  
呵責かさくあり。飽て飲みて食くはらいのどとらくいる餘あらる鬼道きだう乃すなはち苦患わんあり。  
冥途めいどうの鳥とりの別都べつと頓とん宜ぎ壽じゆ血ちゆうと吐つ紅べいの唇に萬客まんにやくの掌てのひらのとあり。  
劔けんの山やまの指ささりに消きえるぬ雪の腕うでに千人せんにんの枕まくらとあらる乃すなはち夢の  
移うつ香かうと嗅かいぬれる人目ひとめの蘭らんと見みる目あり。戀の重荷おもむきといふく知ちら

大月卒 寺是 七 日



不月子時是夜八日

〇三

皮ふこと  
 男女の  
 骨の  
 遊君坤獄  
 一休の道徳を  
 くらむ  
 骨の  
 一休高須の  
 妓樓に酔狂  
 七死生と  
 壽妓歌奴  
 骨の  
 くらむ  
 骨の  
 くらむ  
 骨の  
 くらむ



不月子時是夜八日

〇三



罪の秤量墮の罪あり。容とつらる姿見は是淨頗梨の鏡あり。  
 嫉妬の胸の猛火に提子の水も沸つた。呪咀の釘の劍樹の生川も  
 放と聞月水の血盆のれい小刀針の山刀の衣桁へ乃衣領樹あり。  
 債とてさるへ奪衣婆あり。牛王の鳥鉄の嘴とてして。色とあつり  
 眼と啄の蛇の炎の舌と吐て執念深き膽と食人偽とて死天  
 山。絶ぬ流の華頭河更に浮む期のとと示し。地獄まじり  
 極樂とてさる。西方十万億土は在とつり。実とさるや否と問  
 一休彼地獄の番の袷衣と衣桁より取おらせぬ。硯匣とて  
 染て其袷衣の裏に水の上に圓形と画てのさる。頃日或人我  
 庵より来り。土佐何んかとうかかひり。とて。わの如き繪と讚をりむ。  
 我にこれに書して曰。

水中に物あり。其一物とて。つらつら。画工もあつど。持主も  
 あつど。讚をり。我はあつど。

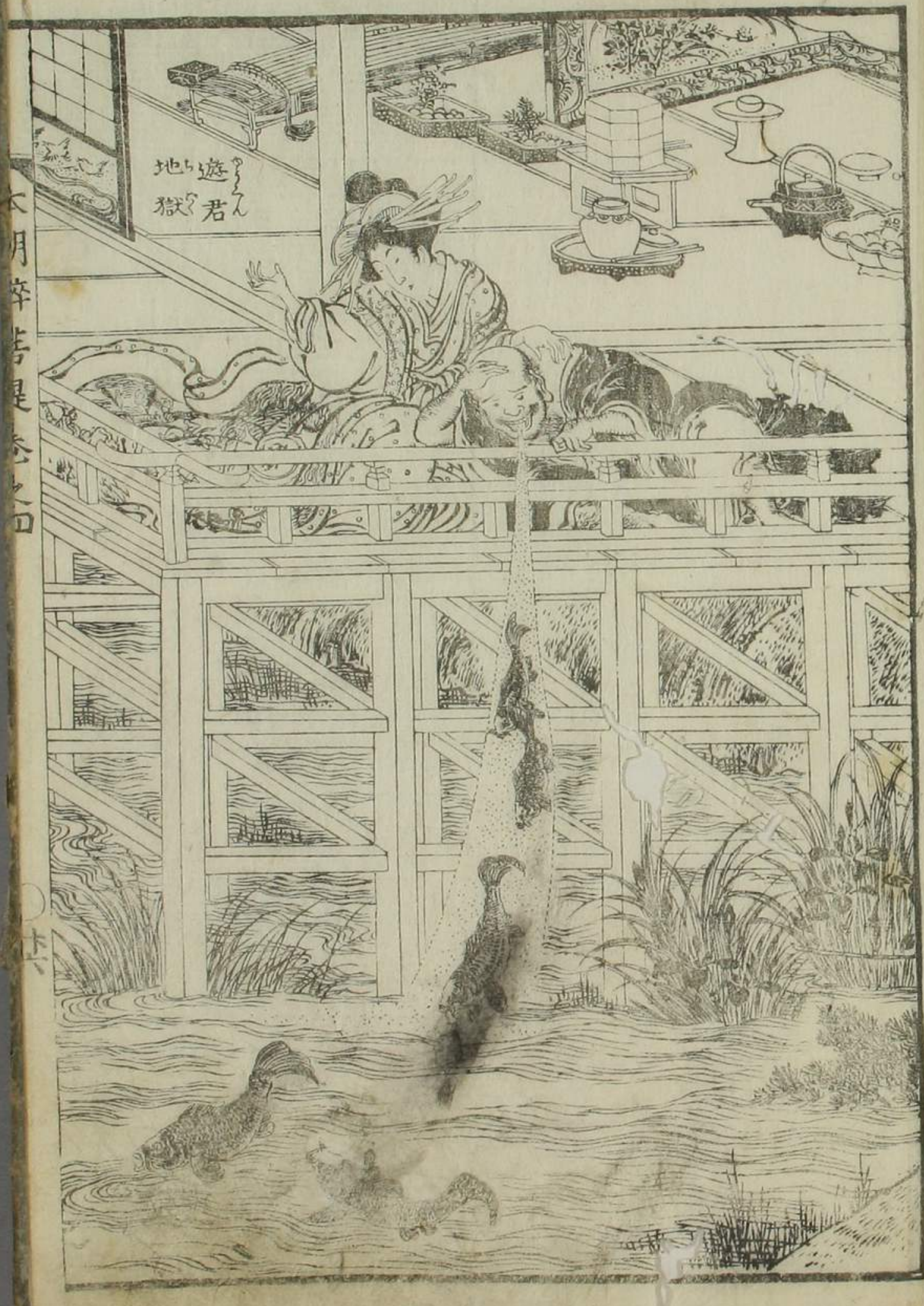
わくもしてつらつら。極樂も又是に等釈迦もあつど。達磨も知ど。  
 問を我はあつど。唯のやうに。地獄の裏にわらぬ。とて。あつど。  
 のさまひける。地獄のいさ。其意と十分の解り。一休傍の水  
 注子とて。角盃は水とて。入あり。此水に面とて。見よ。是心の  
 鬼の角盃。我の器のれ。心の水。わりの心。水のわりの。あつど。  
 煩惱森羅萬像の影とて。是影の来り。とつらる。にわらぬ。心とて。  
 水のり。あつど。又如此水とて。器とて。去とて。則物の影うはる  
 こし。水と捨。器と去。无我に。無心に。示し。あつど。  
 一休水鏡の法語とて。是ありと。地獄とて。問。昨夜の

會元

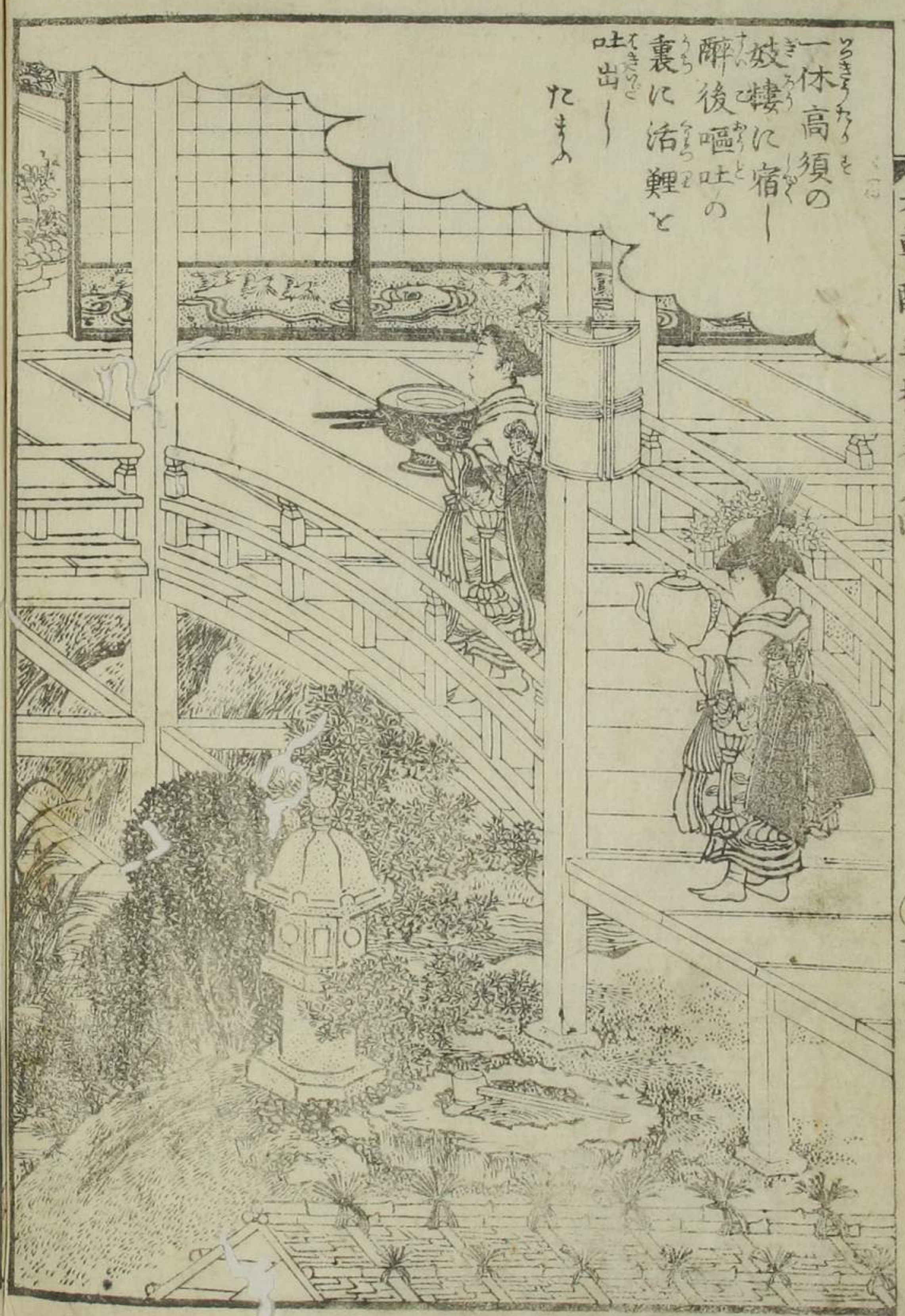
踊歌のうらにも目まゝ一このまゝい。今又妾が抱きゆめりせし時  
 目まゝ一依とのまゝい。其意如何ぞや。一休のまゝい。目まゝ一人  
 具足の自性なり。楞嚴經に阿那律陀の无目而見と説り昔の  
 野に一人の老婆あり。禪法を深飯依し。草庵と造て一個の禪僧を  
 供養し。平日に法と交て二十年をもち。此僧と尊敬し。二八をもちの  
 養女と附きて飯を送り給侍せし。万の夏とせさせたり。一日の  
 雨の黄昏物さびしと幸に老僧の心とひれ見をやと。至乃老婆  
 彼女にいつら。さうくせよとそつら。女庵より出て老僧は  
 ひとり独居の清く。かうせし時、ひとりある。おん意あやと。老僧の  
 抱きつるるに。僧は枯木依寒岩三冬无暖氣とつら。かくひる  
 意は。とて人養人に抱きて。我心の枯木の寒き岩に依るごとく。

狂雲集

冬の時暖まる氣乃少なるが如く心と動とことまゝあり。此女  
 此語とよくおびえ。飯り。老婆に語られた。老婆大に怒り。今ま  
 道と悟る僧とあり。二十年のまゝい。俗人ごれ者と養ひ  
 あらる夏の中まゝい。即時僧と退出し。其草庵と焼捨  
 たり。此僧禪の活機とまゝい。老婆はく活機とまゝい。我此意を  
 偈にほりて曰。  
 老婆心為賊過梯  
 今夜養人若約我  
 清淨沙門與三女妻  
 枯楊春老更生梯  
 此偈の意は昔の婆がらうの盗人の為に梯とけ。通路とにらて  
 中りにあの。ゆゑに清淨なる沙門に艶ある女と与へ今にも養人  
 来りて若我に約束せば枯なる楊ありと。春乃末に梯と出如く



遊地獄君



吐き出し  
さま

一休高須の  
妓嬢に痛  
酔後嘔吐の  
裏に活舞と

才草野書提卷之四

十五

無門 関

心と若やげ。うゝに靡想乱るべし。彼老僧が枯木の暖るた気れを  
 のじその意味あり。されむの老僧も不可あり。婆も不可あり。我を  
 可もく不可あり。向境界とうけて着せざる所遍照僧正の  
 ぬらううゝいざううゆんどの意も是に推て知べきあり。然とくとも。  
 今我汝に心動ざるハ女子出定の話の如く。文殊女子と縁あり  
 如し。目われを可も不可あり。无目而見と云ふ汝がうた死養人も  
 唯臭皮袋にてもたる一具の骸骨あり。男女の嬉樂ハ臭骸を抱  
 とハ是あり。うごきの時う夢乃裏にあり。うごきの人ハ骸骨にの  
 ざる。臭皮又つててりてわつういどこそ男女の別もあは息絶身  
 の皮破もぬもを其別もなし。養醜ももててど。唯今か一づこ  
 りて遊ぶ皮の下に箇々骸骨とつてて持あり。臭皮一重に迷入ハ

撰集 抄

愚あうごやと示しあふをハ一休骸骨の法語と云ふこれありとぞ。  
 地獄是寺の示とばて涙とてうくと落し。我人息乃通うらハ人乃  
 屍と餘所に見て我身にへらた夏の中らにありて。翌日ともあふを  
 今と云ふいざの妾が如き愚昧なる者も悟とひさひこくわう  
 べき夏にゆらん姿とてかえて仏にうらうら。おのづう得道もある  
 べけれど。何つゆも心にまうせざるをハ一をれをとりて益落涙そ一休  
 頭と打ちてのさまり。何ぞ其営業と其體形とてかくるべきや。心  
 にもわぬ虚言とていて人にあさしむ。紅白粉と調弄て容と粧も  
 皆你が本来の営業あり。うでう姿とてかえて営業に背をさわ  
 江口の遊女さぬとてうら歌に。  
 髪れ流し衣のうら保ぬるにまははとさきいゆらる

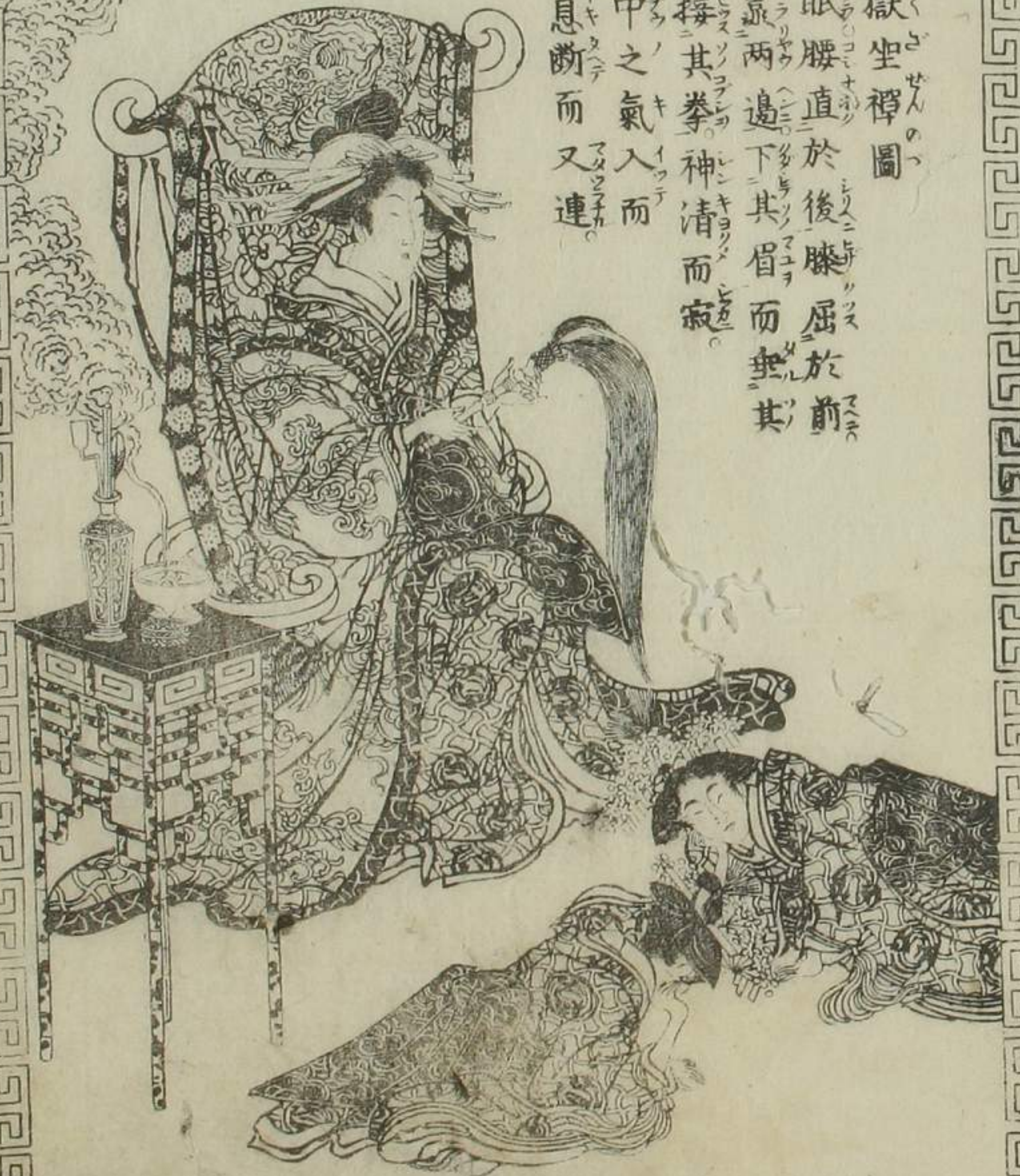
本月卒 是年之口

と讀しん自然の情あり。你が輩ハ五尺の體と賣て一切衆生の  
煩惱と安んぞ法と賣て衆生とまごころを邪禪賊僧にハるるふ  
まごころを。營と形とにやるべし。唯自然の情とまごころと。  
別に道とりのむべし。

極樂と地獄もあつぬるひでん生れぬさの老とまごころ  
世歌の意欲しらく工夫せむ。かまごころ心眼空濶乃時わん。これ昨夜  
の歌錢よ替て汝にのろをそ。携ひし拂子と投子へ。突然と  
志て飯あひぬ。めて地獄へ一休の示と。緑画椅とそらつく色と  
一休の椅子とほくらめ客といふる。ひま一室にこりて椅子に座し  
一休のありし拂子と。眼とそらて坐禪と。初乃りん  
歌妓のうらまげ節の声酔客の器と打りして喚音火車の音の響大

遊君地獄坐禪圖

也。不立也。不眠。腰直於後。膝屈於前。  
壁堅正中。不盡。兩邊下其眉。而垂其  
目。交其手。而接其拳。神清而寂。  
心靜情安。口中之氣入。而  
不出。鼻内之息斷。而又連。  
一塵不染。  
萬念尽捐。  
休生急情。  
傾倚招。  
不。  
背此。美。  
為之。坐禪。



女童の返事の長くしぬなと耳にうつて情懐少も心静なり  
るる目と経て心と練多にど漸々物の色まこえどるる一塵  
不染万念尽忘心清情安ことをあむえたる。今の世までも画傳へて  
女達磨とりの此地獄が坐禪の姿ありとぞ。

○一休地獄と連歌問答の夏衣笠一閑宗葛が堺鏡ふりる  
○元享釋書菅原寺行基傳云。基嘗行化返

故里里人捕魚而宴池邊基過其地年少戲  
以膾薦基基喫之須臾臨池吐出皆為小魚  
游泳去見者驚伏云。本行基の體を一休の所為  
○狂雲集又脱鱗鯉魚庵中得活云詩あり其詩に曰  
活潑々時池水清 怪哉端的死中生

飛潛天地衲僧眼

雲暗龍門點額情

一休の作り一休幼き時活る鯉に引導の語と授て食ふいと  
傳るは是等しうつみ出せる説よや。此詩一休體と吐みし詩  
○因又あるを稻津祇空更て敬雨と稱し洛北紫野又住此の句  
女達磨讚 九年何苦界十年花ころと敬雨の葉集に見る  
○越前三國の遊女長谷川女達磨の讚  
玉簪乃ひびいてあまたのうらさ女にまろくありと  
舞もたれをに男にほほえみきりのあつと我のこころをわすれど  
されどいふ人の依ららと静あんとするもやがらしく唯あそむを  
わと西(東)

あらしつらと尻ねらけらぬ柳かれ

本朝醉菩提卷之四終



本朝醉菩提卷之四

七九終

